
恋愛交渉術

近衛龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛交渉術

【Nコード】

N6162X

【作者名】

近衛龍一

【あらすじ】

目立つことが大嫌いなこれといった特技のない主人公、河北雪。キラキラした人物も苦手である雪はアイドルなんかに興味なし！そんな雪が友達の彩芽にアイドルグループのコンサートに誘われる。しかしたまたま入った予定を利用しコンサート行きを回避！

このことをラッキーと思っと思っていた雪であったが、行った先の親戚の集まりで学校のアイドルである結城翔也を見つけてしまって

――

放課後の教室で

放課後、教室にて

「雪、話聞いている?」

「うん、半分ね」

「半分じゃなくて全部聞いてよ」

「うるさいなあ。これじゃあ静かに本も読めないじゃん」

お気に入りの深紅の栞を読みかけの本に挟み、本をパタンと閉じる。

私の名前は河北雪^{かわきたゆき}。

どこにでもいる至極普通の高校生二年生である。

成績は普通、ルックスは……自分で評価しにくいけど、下の中くらいではないだろうか?

運動神経はそこそこで、かといって得意なスポーツなんかは一つもない。

胸も大きくなく、身長も低い、また足もそこまで長くないので、スタイルがいいわけでもない。

更に趣味は読書といった、これでもかというほど特徴のないのがこの私である。

あゝ、一つだけあったよ、特徴。

実は私は目立つということが大の苦手なのである。

いや、もっと強めに言おう。

大嫌いだである。

人に注目されるのが苦手で、発言するのも嫌なくらい。

逆に目立っている人も嫌いだ。

まあ、嫌いというよりか関わりたくない。
なぜなら目立っている人といれば自分もある程度目立ってしまうか
ら。

だから今では目立つ目立たない関係なく、キラキラとしている人が
苦手。

今や女子校生なら誰もが好きな歌手だのアイドルだの俳優だの言っ
ているが、私はそういうのは一つもない。

毎日目立たないように日々努力し続けているし、その努力の結果、
クラスではモブキャラ並みの地味加減だ。

『地味』とか『存在が薄い』という言葉が褒め言葉である私にとっ
てはこの上ない喜びだ。

そしてそんな私話しかけているのは友達しのめあやめの東雲彩芽。

いや、いくら地味にしているとはいえ、友達の1人はいないと逆に
目立ってしまうよ。

「で？何の話だったっけ？」

「ちゃんと聞いてないじゃん！だから、今度の日曜日に、スイート
エンジェルのライブに行こうよって言ってるの！」

「却下」

「ええっ！？なんで!?!」

スイートエンジェル。

今女子高校生を中心に人気(らしい)のアイドルグループ。
どうも今度こっちの方でライブをするらしい。

くそっ……大人しく都心ですればいいものを……

「あのね、私がそういうのが苦手っていうの知ってるでしょ？」

「だ、だってそんなこと言っても好きなグループの一つくらいない
と話に乗れないよ？この機会を機にスイートエンジェルのファンな

ろうよ！」

「そんなもののファンになるくらいだったら話に乗れなくても結構行きたいなら1人で行けばいいじゃない」

「嫌だよ1人でなんて〜」

「じゃあ行くな」

「ケチ！どうせ日曜日暇なんでしょ？行こうよ！」

「だ〜か〜ら〜、私はそういうのには行かないの！」

「いいもん！じゃあ雪のお母さんに電話して日曜日に予定がなければ明日香を連れて行ってもいいか聞くから！」

「そ、それはダメ！」

私のお母さんはいつも友達付き合いを大事にしなさいという人だ。そして私が逆らうことの出来ない（現在のところ）唯一の人物である。

「ふんだ！絶対にするんだから！ええつと……あつた！」

「ああつ！」

携帯を取り出し、電話をかける彩芽。

この鬼め！

「あ、もしもし雪ちゃんのお母さんですか？雪ちゃんの友達の彩芽です」

『ああつ、彩芽ちゃん。こんな時間にどうしたの？まだ学校でしょ？』

「はい。一つ聞きたいことがあるんですが、明日香ちゃんは今週の日曜日に予定、入ってますか？」

頼むっ！入っててくれ！

つて、入ってないのは分かってるんだけど……

『あゝ、予定ね〜……微妙ね、ごめんね彩芽ちゃん、ちょっと雪に代わってもらえるかしら?』

「あ、はい」

『はい』と携帯を差し出す彩芽。

微妙ってことはまだ突破口が!?

「もしもお母さん?雪だけだ」

「雪?実はね、親戚の1人が結婚したから、身内だけでちよつとした集まりが日曜日にあるの。それで、雪は来てもこなくてもいいけど、どうする?」

「行く!行きます!行かせていただきます!」

「そ、そう?それじゃあ彩芽ちゃんにはそう伝えておいて?」

「はい!」

元気良く携帯を切って彩芽に返す。

「ごめんね彩芽。日曜日は親戚で集まるらしいから」

「うつつ……そういつてる雪の顔がにやけてて謝ってるようには見えない……」

「え?そう?」

親戚の集まりはめんどくさく、もう小学校低学年のころから行っていないが、ライブなんかに行くよりは十二分にマシであろう。
ナイスタイミング!

ん?なんだか外がうるさいなあ……

「ねえ雪、あれってなんの騒ぎ?」

窓の外では女子二十人ほどが集団で固まっていた。

「ん？ああ、たぶんあそこの近くに結城君がいるんじゃない？」

「あゝ、答えになってないんだけど？」

「簡単に言つと、結城君のファンクラブの子が結城君を追っかけてるの」

「ふ〜ん……ご苦労様ね……」

「女子ってああいうものよ？」

「なら女子ってバカ」

「雪だつて女子じゃん……」

「私はあるなこと絶対にしないもん」

ポーンと窓の外を見る。

あ、いた、結城君。

結城君。

私と同じ学年の男子。

入学一ヶ月にしてファンクラブが出来たといわれる学校のアイドル。その顔立ちはファンクラブが出来るのに相応しい、まるで二次元から飛び出してきたかのような整った顔立ちである。

彩芽情報によると、いつもクールであり話さないところが尚かつこいいたとか。

でもそれって悪く言えば冷たくて言葉数が少ないってことだよな？因みに、結城君はあまり友達を作らず、三人としか基本仲よくしないらしいんだけど、その三人もまたカッコいいらしい。

類は友を呼ぶってやつかな？
それにしても……

『結城君！い、一緒に帰らない？』

『断る。近寄るな』

『キヤー！は、話した！結城君と話したよ！』

あんたらはバカか……

今バカにされたんだよ？近づくなって言われたんだよ？

なんで喜んでるんだよ……

ほんと、バカみたい……

ああいうキラキラした人って大変ね……

ま、私には関係ないけど。

「あ、雪ったら興味なさそうな顔してる」

「うん、だって興味ないもん」

「ほんと、雪って珍しいよね」

「そう？私はそうは思わないけど」

「珍しいの。だってああいうかつこいい男子に興味ないんだよ？というか男子に興味持ってないし」

「悪い？というか興味持つ必要ないし」

「あゝ、もしかして雪、百合？」

「なんでそうなるのっ！？違うわよ！」

「男に興味がないんでしょ？だったらそうとしか考えられないよ」

「そんなんじゃないから！私は！」

「キヤー！雪の手によって私の貞操がー！」

「んなわけあるか！」

「あはは！ごめんごめん。でも男に興味持たないとそうとしか思われないうよ？」

「男ね……」

別に興味持つ必要はないけどなあ……

放課後の教室で（後書き）

感想お待ちしております！

運命の？再開

ブローロー

一面見渡しても畑しかない畦道を一台の軽自動車が走る。

その自動車の窓からは、至って普通の女子が顔を出して、風に当たっていた。

「あゝ、この空気久しぶり」

「そうよ。雪がまったく集まりに行かないから。いつ振りだと思ってるの？」

「小学校低学年で最後かな。なんだか面倒くさかったし」

「そんなこと言わないの。でもよく今日はいく気になったわね？」

「ま、まあ、たまにはね」

まさかアイドルのコンサートに行かなくていいようにする為、なんて言えるはずもない。

「翔也君もきつと喜ぶわ」

「翔也君？」

「そうそう。覚えてない？昔よく遊んでた」

「あゝ！いたね、そんな子」

確か長瀬翔也みたいな名前だったと思う。

小さいころはこうやって集まる度に一緒に遊んでいた。年は覚えてないけど、私よりも小さくて、私がお姉さんみたいな感じだったから年下だろう。さ

「でも、なんで翔也君が喜ぶの？」

「それがね、雪が来なくなっても集まる度に雪は来てないですか？
って」

「へ〜、そうなんだあ〜」

「多分翔也君に会ったらビックリするわよ。翔也君、高校生になってとってもイケメンになってるから！」

「ふ〜ん。イケメンね」

でもきつとウチの結城君には敵わないのだろうけど。でも高校生なんだ。

一つ違いだったのか〜。

「昔は雪の方がお姉さんって感じだったのに、今じゃ翔也君の方がお兄さんって感じよ？」

「え〜？仮にも年上なのに？」

「何言ってるのよ。雪と翔也君は同じ年よ？」

「え、ええっ!?!」

「そんなにビックリしないの」

「だってあの翔也君だよ!？迷子になって泣いてた翔也君だよ!？」

「そうよ。知らなかったの？」

「知らなかったよ……」

「まったく……でも翔也君、強くなったわよ〜」

「強くなった？それってどういう意味で？」

「実はね、翔也君のところのご両親、離婚しちゃったんだって。それで、翔也君はお母さんの方、それがこっち側の方なんだけどこっち側で引き取られてね〜。お父さんがいなくなったのに、落ち込ま

ないでそれを感じさせないのよ」

「ってことは精神的に強くなったってこと？」

「そういうこと。ほんと、礼儀正しいし、雪のお嬢さんに欲しいわ」

「ちょ！お母さん！何言ってるのよ！」

「冗談よ冗談。ああ、そういうえば、離婚して苗字かわ変わったって
言ってたけど……なんて名前だったかしら？うーんと、確か……」

「確か？」

「うーん……そうだ！思いだしたわ！確か結城って苗字になった
んだわ！」

「結………城………？」

まさか、そんなことありえないよね……

単なる偶然よね……

そうよ！結城っていう苗字の人なんて日本にたくさんいるんだもん！
偶然被ることだってあるわよ！

小さいころからよく遊んでいた翔也君と、学校のアイドルである結城君が同性であるということを知ったつい先ほど。

私の脳内では満場一致で偶然という結論が出されたのできつと偶然だろう。

「雪、着いたわよ」

気づけば目的地である親戚の家に着。

車から降りて背伸びをする。

新鮮な空気が体の中に取り込まれて気持ちいい。

「ほら雪。さっさと行くわよ」

「あ、待って！」

それにしても久しぶりだな〜！

この家！懐かしい匂いがするよ〜！

懐かしい匂いを感じながら、私は走ってお母さんを追った。

ピンポーン

『は〜い』

「あ、由子です〜」

由子とは私のお母さんの名前である。

「ああ、由子さんね。扉、開いてるから入っていいわよ」

親戚の叔母さんの声、変わってないな〜

「「お邪魔します〜」」

「いらっしやい由子さん。あら！もしかして雪ちゃん！？久しぶりね〜！いつ以来かしら！」

「どうも、ご無沙汰しました！」

「今日は珍しく雪が来たと言って言うから連れてきたの」

「ほんと〜！さ、上がって上がって！翔也君ももう来てるわ！翔也君〜！雪ちゃんが来たわよ〜！」

『お！マジで！？今行く！』

恐らく、奥にあったリビングであろう場所からタタタタツ、と走ってくる音が。

何もかもが久しぶりだからな〜

翔也君、どんな風になったんだろ？

「久しぶり！雪！」

「うん久しぶり……翔……也……君……？」

何で……？

何でここにいるの……？

180センチの長身、少しだけ立てている薄茶色の髪に、蒼い瞳、この世に二つとないほどに整った顔を持った男の子。

そう、なぜかリビングからは学校のアイドル、結城君が出てきたのだ。

ってこれって死亡フラグ！？

今結城君が出てきたってことは結城君と私は親戚ってこと！？そんなことが学校にバレたら……！！

『ねえ、河北さんって結城君の親戚なんですよ？私のこと、紹介してくれない？』

なんてことになりかねない！

そしたら私のモブキャラ人生は！？

目立たない最高の人生はどうなるの！？

ここ数年で最大のピーンチ！

ああっ！こうなるんだったら彩芽と大人しくライブに行くんだっだよ！

「？どうした雪？久しぶりすぎて俺の顔忘れたのか？」

「え？ああ、うん。ごめんね」

ん………？待てよ………？

久しぶり……………？

……………ってことはまだ結城君は私と同じ学校ってことに気づいてない！？

これはチャンス！

結城君がまだ気がついてないってことはそれだけ私の存在が薄いということ！

つまりこの場で同じ学校ってことに気づかれなければ安全ってこと！？

よしっ！こうなったらなんとんでも乗り切ってやる！

と、意気込んだ私だったが……………

「雪！あんた翔也君と同じ高校だったんだってね！」

このバカ親のせいであえなくバレてしまった……………

いや、上手くいったんだよ？

結城君はほとんど話しかけてこなかったし、親戚同士の会話でも、言葉数が少なかった。

だから、意外と上手くいくと思っていたのに、お母さんが結城君と話し始めてから数分。

なんと高校の話になって結城君と同じ学校だということがバレてしまった……………

しかも、お母さんの助言（命令ともいう）により、結城君と携帯番号とメールアドレスを交換することになってしまった……
はぁ……どうしよう……

「よかったじゃない雪!」

……お母さんめ……一生恨んでやる……

運命の？再開（後書き）

感想お待ちしております！

彼は再び現れる

「はあ……憂鬱……」

結城君と親戚だったという事実が発覚した次の日、当然のごとく学校というものがあるわけで……

誰もいない教室で1人机に伏せる私。

現在の時刻は朝の6時半。

部活生や先生達がチラホラ登校しているものの、教室にいるのは私1人だ。

本当はこの静かな空間で本を読むのが日課なのだが、昨日の出来事で私の頭は一杯である。

うつっ……お母さんが余計なことさえしなければ……

とは言っても既に時遅し。

結城君は私がこの学校にいることを知っている。

ただ、一つだけ安心なのは、親戚だということ。

確かに仲がいいというのは事実だが、その情報が漏れる可能性は極めて少ない。

何故ならば、私はもちろん、結城君が親戚がこの学校にいる、という話を話すことがないからである。

元々言葉数の少ない結城君なので、その部分は安全だ。

だから一番気をつけないといけないのは学校にいる間は結城君に会わないようにしないといけない。

もしも結城君がすれ違い様に『またな、雪』なんて言った日には私の人生は終わってしまう。

幸いにも、結城君とは離れたクラスなので、基本的に教室から離れなければ大丈夫。移動教室の時も、時間ギリギリで行動すれば安全なはず。

できる限りの施策を練って、自分の人生を守らないといけない。

よって、私は本を読むよりも、結城君と会わないようにするための施策を練る方が大切なのである。

うーん……今後お弁当は絶対だし、図書室に寄るのも控えて、近所の図書館で借りることにするか……

すると突然、あれこれ考えていた私の目の前が真っ暗になった。

「だーれだ」

そんな言葉が今現在私が最も聞きたくない人の声となって聞こえてくる。

「あ……変態……？」

「いや、そりゃねえだろ……」

私の目を隠していた両手がのき、視界が明るくなる。

「よ、雪」

「よっ、じゃないですよ、結城君……」

そう、振り返るとそこには結城翔也がいた。

普通の女子ならそんなやり取りに胸を膨らませ、ドキドキするんだろうが、私は誰かに見られてないだろうかという別の意味でドキドキしていた。

「敬語はやめてくれよ。それに何が結城君だ。昨日は翔也って呼んでくれてたじゃねえか」

「昨日は親戚の翔也君。今は学校の結城くんなんです」

「ほ？口ごたえね？」

何やら怪しげな笑みを浮かべ、結城君は……

「ちょ！？な、なにするんですか！？／／／」

私に抱きついて、顎を頭の上に乗せてきた。

「顔、真っ赤。可愛い」

「なっ！そ、そんなことより離れてください！」

「嫌だ」

「何ですか！？」

嫌だって子どもかよ！

早く離れてよ！普通だったら痴漢だよ！？

「雪が俺に敬語やめて翔也って呼ばないと離れない」

「なんですかその我儘は！」

「我儘でいい。言っとくけど俺はこのままでも困らないから」

「私が困ります！早く退いてください！」

「嫌だ。さっき言った条件飲むか？」

「……っ！！」

完全に遊んでる！

私を困らせて遊んでるよ！

「……分かったよ……ちゃんと翔也君って呼ぶから……だから離し

て」

「嫌だ」

「ええっ!?!」

何言ってるのこの人!?

約束が違うんだけど!?

「だって雪気持ちいいんだもん。このままでいたい」

「だ、ダメだつてば!」

「それは誰かに見つかって目立つのが嫌だから?」

「そうだよ!分かってるなら早く……つて、え?」

もしかして、見破られたの……?

私の考えを?

嘘……

「俺が気づかないとでも思ったか?」

「……いつから気づいてたの?」

「昨日の夜。でも薄々感じたのは雪のお母さんと話した時」

「……どういふことか教えてもらえる?」

「自慢じゃないけど、俺はこの学校で有名人だよな?」

「うん」

「仮に雪が俺と親戚だつてことを知らなくても、俺を見た瞬間に俺と同じ学校だということに気づくはず。なのに雪は何も言わなかった」

「でも最初から知ってたら言う必要がないじゃん」

「だから雪のお母さんと話して気づいたんだよ。雪が最初から知ってても知らなくても、雪のお母さんが俺が雪と同じ学校に通っていることを知らないのはおかしいってな」

「……」

「それでももしかしたら雪はこのことを隠してるんじゃないかって思った。そしてさっきの結論に至る」

「……………ご名答です」

そう、まったくもって翔也君の言うとおり。

彼は見事な推理を披露してくれた。

……………私に抱きついたらままで。

「で、いつまで抱きついてるつもりなの？叫ぶよ？」

「どうぞご勝手に。目立ちたくない雪が叫べるならね」

「……………」

ダメだ。完全に読まれてるよ…………

「あゝ、変態さん？退いてくれないと本気で困るのですが？」

「うん、いいよ。俺は困らないし」

「……………」

なんなんですかこの自己中様は！？

そんな甘いマスクでも俺様キャラでも私には意味ないんだからね！？

「ん……………やっぱり雪は良いにおいがする。反則。だから抱きついている」

「それ、理由になってないからね？」

「俺とっては十分な理由」

昔は弟分みたいな感じだったので、何処か憎めないところが面倒だ

…………

「でもなんで今日はこんなに朝早く来たの？いつもはこんなに早くないでしょ？」

「雪のお母さんに雪がいつも何時頃に家を出るか聞いた」
「……………」

あのバカ親め……………っ！
帰ったら覚えてなさい！

ってそんなことより早く翔也君に退いて貰わないと……………
う〜ん……………どうやってたら退いてくれるかな……………？

……………ここはもう一回敬語に戻すとするか。

「あの、結城君？退いてくれないかな？」

「敬語？そういうことね。そんなことしても俺は退かないぞ」

「そうですか？でもこれを続けなければいずればやめるんじゃない？」

「……………よくわかってるじゃん。仕方ないな。あんまり荒療治はしたくないけど……………」

「ちよ、何をするんですか……………？」

「キス」

「キ、キスって！何をさらっと言ってるんですか！ダメですよ！」

何を言ってるんだこの人は！？

王子様でもそんなことサラッと一言わないぞ！？

「いい。無理矢理する」

あんたは何様じゃ！？

「しないでください！それ痴漢ですよ！？」

「じゃあこうやって抱きついてるのは痴漢じゃないと」
「そ、そういうわけでは……………」

うつうつ……………ああ言えばこう返されて、とてもじゃないけど太刀打ちできない……………」

私がどうしたものかと困っていると、

「困った顔も可愛い」

「ああっ！からかうな！一体私みたいな人をからかって何が楽しいの！？」

「からかってるんじゃない。本音」

「んなわけないでしょうが！」

こんな私が可愛い？

それをもし本気で言ったのだとしたら一度眼科か精神科に行くべきだと思う。

「そこまで言うか？お、もう7時半」

「え！？もう！？」

時計をみると、その通りできっちり針は7時半を指していた。

「つて！そろそろ皆が登校し始めるじゃないですか！」

「また敬語に戻った」

「そんなことはどうでもいいから早く離れてください！」

「はあ……………仕方ないなあ……………」

「仕方ないなつて……………」

でもまあとりあえずこの状態から開放されるのだと一安心している
とー

私の額に翔也君の唇が落とされた。

c
h
u

何ですか今の効果音は!?

「ちょ!な、何を! / / /」

「顔、真っ赤。体は正直」

ニヤリと妖っぽい笑みを浮かべながら、翔也君は私から離れて、教室を出ていった。

ほんと、何がしたかったんだろ……………? ?

彼は再び現れる(後書き)

感想お待ちしております！

届かぬ想いだとしても

翔也 side

『雪〜！遊ぼうよ〜！』

『翔也、また？仕方ないな〜』

『僕ね、雪のことが好きだよ〜！』

『何よ急に〜』

『本気だもん！僕が大人になったら絶対に雪をお嫁さんにするから〜！』

『え〜？じゃあ翔也がかっこよくなって、強くなって、泣かなくなつたらいいよ』

『約束だからね！絶対だよ！』

『分かった分かった。約束ね』

「翔也、ちょっといいか？」

それは中学生になったばかりの春。
俺は父さんに呼ばれた。

リビングには父さんと母さんが食卓に座っていて、その2人の前には一枚の紙と判子が二つ、置かれていた。

「翔也、私たちは離婚することになった」
「……………そうか」

前々からそんな雰囲気だったからな。
今更驚くこともない。

「それでだ。私の方に来るか、母さんの方に残るか、お前が決める」
「母さんの方に残る」
「即答だな。まあいい。じゃあな」
「ああ……………」

「……………いいの？翔也、本当にこっちで」
「もちろんだ。母さんの方に残らねえと雪に会えねえ……………」
「雪ちゃんね……………。しばらく集まりにも来てないわね……………」
「ああ、でもいずれ来てくれるさ。いずれ、な」
「そうね……………。ほんと、翔也も変わったわね……………」
「雪の為にな……………」

俺は雪とあの約束を交してから変わった。

いや、変わろうと努力した。

顔はどうしようもねえが、他を変えた。

毎日筋トレして、体鍛えて、強くなって。

そして泣かなくなった。

昔は迷子になってよく泣いていたが今は違う。

もう泣かない。雪の隣にいたいから。

雪の側にいたいから。

だから今回だって泣かないんだ。

でも、俺が泣かなくなっただれほど経ったのだろうか。

雪と会わなくなっただけで精々3、4年程度のはずなのに、なんだかそれが十年も会ってないかのように感じる。

親戚同士で集まる度に期待して行くのに、もう雪は来なくなった。

なんで来なくなったんだらうな……

雪、お前はあの日の約束を覚えているのか？

俺は覚えてるぞ？

雪、お前は今何をしている？

俺はお前を待っているんだぞ？

雪、早く会いてえよ……

会ってお前を抱きしめたいよ……

なのに……なのになんで雪は、もう来なくなっちゃったんだよ……

あれからもう4年。
もう雪とは会えないんじゃないかと思いはじめた高2の春先。

親戚の一人が結婚したらしく、それを祝うために集まる、と母さんに言われた。

この集まりで雪が来なかったらもう会えないんだろうと俺は思った。俺の最後の望み。

そんな思いで親戚の家に行った。

そして奇跡は起きたんだ。

俺の望みは通じたんだ。

雪、お前が来たんだ。再開できたんだ。

変わらないお前と。

お前と同じ高校だったってこともすぐに知った。でもすぐに気がついた。

雪が俺を避けていることに。

理由もすぐに突き止めることができた。

目立ちたくない。地味な存在でいたい。

その理由は俺を避けるのには充分すぎるものだった。

残酷。

そんな言葉が俺の頭を過る中、俺は行動した。

朝早くから学校に行つて、雪と2人だけの空間。

今まで会えなかった分もまとめて、俺は雪を抱きしめた。

初めて抱きしめたのに、どこか懐かしい感覚。

しばらく話し、そろそろ生徒も登校してくる頃なので、雪に離れて

くれと言われた。

だから俺は離れた代わりに、

ch u

雪の額に唇を落とした。

妖っぽい笑みを浮かべ、俺はお前を離し、教室を出る。

「ったく……何をやってんだろうな……俺は……」

未だ高鳴る心臓を抑えて歩き出す。

本当はまだ離したくなかった。

ずっとあのまま抱きしめていたかった。

でも今回はここまでだ。

雪、これは俺の宣戦布告だ。

たとえお前が俺を避けようと、拒否しようと構わない。

ただ、お前の頭の中に俺の存在がある限り、俺はお前を諦めない。

どんな方法であろうとお前の頭に俺の存在を残してみせる。

そして必ず、お前を手に入れる。
長年の想い。それを叶える為に。
雪、分かってるのか？

俺はお前が好きなんだよ。

俺はモテるためにここまで来たんじゃないんだ。

お前を手に入れるために、ここまで頑張ってきたんだよ。
どれほどの女に好かれても俺にとっては何の価値もない。

ただ、お前が欲しい。

そう、願ってきたんだ。

それが今、叶おうとしている。

だから絶対にこのチャンスを諦めない。

この想いを伝えてみせる。

たとえそれが『届かぬ想い』だとしても。

必ず届かせてみせる。

勝負だ雪。

俺が勝つか、お前が勝つか。

負ける気はないし、手加減する気もない。

全力でお前を俺のものにしてやるよ。

届かぬ想いだとしても(後書き)

感想お待ちしております！

朝の朗報

「おはよ、雪。ってどうしたの？具合悪そうだけど」

「ん？ああ、彩芽か。ほんと、色々あつて具合悪いよ……」

「色々つて何があつたの？」

「あ……それはちよつと言えないかな……」

「え……なんで？いいじゃん、友達でしょ？」

「ダメなものはダメ」

まさか翔也君……いや、結城君の親戚だ、なんて言えるはずもない。

「まあ、そこまで言うなら無理して言わなくてもいいけど……。あ、そういえば雪知ってる？あの結城君に好きに人が出来たんだって」

「へ、へえ、そうなんだ。でもどうして分かったの？」

結城君の名前が出て一瞬ドキツとする私。

でもどうやら私には関係ないようだ。

「なんでも、今日の朝結城君に告白した子が、好きなやつが出来たからって言う理由で断られたんだって。それに結城君の機嫌がいつもよりいいらしいし。あ、あ、一体どんな子なんだろうね？結城君が好きな子って」

「きつと勉強も出来て運動神経もよくて、可愛くて性格もいい優等生なんじゃない？」

「そうだよね、それだったらきつと野々村さん辺りかな？」

「へ、そんな完璧な人いるんだ。ちよつとした冗談で言ったのに」

「ゆ、雪！？あんだ野々村さんってウチのクラスよ!？」

「え？そうなの？」

「はあ……………雪がクラスメイトに興味がないの知ってたけど、そこ
までとは……………」

「知らないものは知らないの」

元々そういう完璧な人を苦手とする私は、そういう人は尚更覚えな
いのだ。

というか、結城君は何をしてるのだろうか？

そんなに素晴らしい人を好きになっておいて、私のところに来て抱
きつくなんて……………

いくら親戚でも普通の女の子だったら嫉妬するぞ……………

とりあえず次に会ったら警告しておかないと。

でもまあ、これで不安ごとくも解決できそうだな。

結城君とその野々村さんって子が付き合い始めたら、それを理由に
あんまり関わらないようにすればいいし。

「どしたの雪？急に機嫌が悪くなったみたいけど？」

「ううん。クラスメイトの幸せは私も嬉しいからね」

「……………嘘くさい。あ、ほらほら、あれが野々村さんだよ」

眉間にシワを寄せながら私を疑いの目で見る彩芽だったが、教室に
入って来た1人の生徒に目が行き、すぐにまたいつもの表情に戻る。
彩芽の見る方向を見ると、そこにはなるほど、あの学校の王子様で
ある結城君が好きになってもおかしくないような素晴らしいシルク
スを持った女子生徒がいた。

どうやら他のクラスに行っていたらしく、荷物のかかっている席に
座る野々村さん。

ふむ。見たところ胸もDぐらいあるのではないだろうか？

オマケに彩芽が言うには運動神経も良くて頭もいいらしいから完璧

な人なんだろうな。
ほんと、キラキラしてる。

席に座った野々村さんを取り囲むように、すぐに他の女子生徒が4、5人集まる。

『愛香聞いた？結城君に好きな人が出来たらしいよ？きっと愛香のことだよ！』

『え〜？そうかな？でも確かにさっき、結城君が機嫌良さそうに私に挨拶してきたっけ？』

『もうそれ確定だよ〜。いいな〜、愛香は』

『早ければ今日の昼休みくらいには告白しに来るんじゃないの？』

『そんな大袈裟だよ〜。それにまだ私のことが好きって決まったわけじゃないんでしょ？』

『だからもう決まったようなものだってば』

『ねえねえ、愛香。結城君と付き合い始めたら私のこと紹介してくれない？工藤君たちと仲良く出来るかもしれないし！』

『あ！それいいかも！よろしくね、愛香！』

『もう皆気が早いよ〜』

うん、ガールズトーク全開だね。

しかしまあ、情報が早いもんだ。

もう広まってるよ。

というか、野々村も否定しつつ顔は得意げでいかにも羨ましいですよ？というような顔だ。

ま、あの結城君に好かれてるんだし仕方ないか。

早くあの二人がくっつけばいいのにね〜。

「ねえ彩芽、あの子達が言ってる『工藤君たち』って結城君の友達のこと？」

「そつだよ。工藤来夢君、鷲鷹龍星君、織田元就君。みんな結城君に負けず劣らずのかっこよさなんだよ！」

「……………彩芽つてさ、ストーカー？なんで全員の名前まで知ってるの？私なんて1人の苗字も分からなかったよ？」

「いや、逆に1人も知らない雪の方がおかしいよ……………」

「そんなものかな？ま、いつか」

—先ずの朗報に安心した私は、朝の騒動の疲れを取る為に、机に突っ伏した。

朝の朗報（後書き）

感想お待ちしております！

不測の事態

先生たちの催眠術のような有難いお経をご静聴し、やっと昼休みになった。

クラスでは、結城君が野々村さんに告白する、という確定形となつて、その話で持ちきりとなつていた。
ほんと、みんな暇人である。

まあ、かく言う私も結城君が早く告白することを望んでいるのだが。

「雪、お昼一緒に食べようよ」

「いいよ」

近くの机を引っ付けて、向かい合うように彩芽が座る。

「結城君、今日中に告白するかな？」

「またその話？別にいつでもいいじゃん。彩芽が気にしたって間違つても結城君が彩芽に告白しに来ることはないんだから」

「何よそれ。ま、確かにそうだけどさ」

「でしょ？それにそんなこと気にする暇ちゃっちゃんとご飯食べて本読んで方がいじゃん」

「それは雪だけでしようが。雪は本ばっか読むもん」

「本は人類の生み出した最大の娯楽よ？」

「はいはい」

どうでもいいといったようにミニハンバーグを口に放る彩芽。

まったく、自分な好きな話をするとき（9割方スイートエンジェル）の時は無理矢理聞かせるのに……

正直言つて本の話ならかなりの時間する自信がある。

それにしても……………

『愛香も心の準備しときなつて』

『え〜？早くない？』

『早いに越したことはないって。もう愛香で確定なんだから』
『そうかな〜？』

どれだけの確信があるんだよ……………

野々村さんも謙遜してるけど、顔はドヤ顔になつてるし……………

そりゃあれだけのルックスなら申し分ないけども……………

「いいな〜、野々村さん」

「何？そんなに結城君と付き合えることが嬉しい？」

「そりゃそうでしょ！というか雪は羨ましくないの!？」

「別に思わないけど……………」

「ほんと雪って変だわ……………」

「ほっとけ。大体彩芽の好きな人って結城君なの？」

「え？ま、まあ違うけど……………」

「へ〜、誰が好きなのよ」

「そんなの言えないよ!」

顔を真っ赤にして否定する彩芽。

これ以上おちよくるとかわいそうだけど、それ以上に面白そうという感情が勝っちゃうんだよね。

「誰々？教えてよ!」

「い、嫌だよ!」

「仕方がないな〜、スイートエンジェルのプロマイドカード、一枚あげるから」

予てから、彩芽がスイートエンジェルが好きと言ったことを知ってちよくちよくプロマイドカードを集めている。もちろんこうやって彩芽を釣るためだ。

彩芽も集めているのだが、執着心が弱いほどいいカードが当たるもので、彩芽よりもレア（らしい）を当てているのだ。

「え！？ほんと！？じゃ、じゃあ仕方ないな。教えて上げる。その代わりぜったいに誰にも言わないでよ！」

「分かった分かった。で、誰？」

「さ、鷺鷹君……………／＼／＼」

「鷺鷹君って……………朝言ってた結城君の友達なの？」

「そう、だから野々村さんが羨ましいなあ、って」

「ああ、結城君の彼女ってことは自然とその鷺鷹君に近づけるからね。だったら野々村さんに頼んで会わせてもらえばいいのに」

「む、無理だよ！野々村さんは私と住む世界が違うし、そんな理由で近づいたら下心丸見えじゃん！」

「だったら諦めたらいいじゃん」

「はあ……………そうだよね……………」

そこまで落ち込むか……………？

って、私まだ全然ご飯食べてないし！

本も読みたいので急いでご飯を食べようとしたとき、

ガラッ

教室の扉が開いて、その瞬間、教室が静かになった。開いた扉に立っていたのは、このクラスの話題の元、結城君。

『来たきた！きつと愛香に会いに来たんだよ！』

『ほら！行きなよ！』

『う、うん…… / / /』

数名の女子が急かしながら、野々村さんを前にやる。野々村さんも流石に緊張しているのか、頬がほんのり桜色に染まっていた。

そんな中、結城君はゆっくりと野々村さんに近づいていく。そして野々村さんと話せるくらいの距離になりー

『ゆ、結城君、何の用ってあれ……？』

話しかける野々村さんを通り過ぎ、私の前にきた。何してんのこの人は……？

私は状況が飲み込めず、卵焼きを啜えたままだ。

「よかった。まだ食い終わってないな。こい、一緒に食うぞ」

何故だろう……

この人は私に話しかけているような気がする……とりあえず卵焼きを急いで飲み込み、箸を置く。

そして念の為、後ろを向くが残念、ここは窓際の為、見えるのは外の景色だ。

仕方なく前を向き、結城君と面と向かう。

「あ、結城君？話しかける相手、間違っていない？」

「間違っていない。俺は雪を飯に誘いにきたんだ。それと結城君ってなんだよ。翔也って呼ぶんじゃないかったのか？」

『ね、ねえ……今結城君、河北さんを誘ってるのよね……？』

『た、多分……それに雪って呼んでなかった……？』

『う、うん…… オマケに結城君って呼んだことに怒ってない……？』
クラスの皆が私の方に注目している。
まあ正確には私と話している結城君、なのだが。
とうるかやめてくれ！
目立つのは嫌いなんだよ！

隣では彩芽が、結城君の後ろでは野々村さんが啞然としている。

「ほら、早くしろよ」

そっぴいながらテキパキと私の弁当箱をまとめる結城君。
って何してんの!?

「ちょ！何をしてるの!？」

「何って……移動するんだよ。行くぞ」

まとめたお弁当箱を片手に空いた方の手で私の手を掴み、引っ張る。

「ちょっと待った！せめて彩芽も一緒に！」

「お前の友達か？」

「そう！そうだから！」

「まあいいだろ」

「あ、彩芽！あんたも来なさい！」

「え!?!私も!?!」

「いいから!」

「う、うん……」

彩芽に早急に弁当をまとめさせ、連れていく。

そして私たちは、某然とするクラスメイトを後に連行されてしまっ

た。

不測の事態（後書き）

感想お待ちしております！

人の話を聞けっ！

「んで、何のつもりなの？」

結城君に無理矢理連れて来られた私は引つ張られながらも状況説明を求めた。

「さつきも言った。雪と飯を食う為」

「私は彩芽と2人で食べたいんだけど？」

「んなこと知るか」

「知ってよ！結城君の所為で目立ったじゃん！」

「別にいいだろ。殺されるわけじゃあるまいし」

「殺されるよ!？」

いや、マジで危ない。

恨みを持った女ほど恐ろしい生き物はいないからね。

「だったら俺が守る」

「それだともつと殺される確立が高まるんだけど……?」

まさに火に油を注ぐの典型的パターンだと思う。

「ちょっと彩芽!どういうこと!?結城君とどういう関係!？」

今度は彩芽の方が私に状況説明を求めてきた。まあ確かに、急に学校のアイドルが自分の友達をお昼に誘うところなんて見たらそう言うよね。

「実は、結城君は私の親戚だったの。私もついこの間知ったんだけ

ど、そんなことが他の女子に暴露たら殺されちゃうから黙ってたんだ……………」

私が彩芽を連れてきてしまった手前、彩芽に黙っておくわけにはいかなかったので仕方なく本当のことを話す。

「なにそれ…………… 結城君と親戚なんて一体どんな確立なのよ……………？」

まあ天文学的数字であることは確かだ。
宝くじ買って当てるより難しいだろう。

別に……………、というより、寧ろ親戚じゃない方がよかつたのだが、昔からよく遊んでいた為に今更そんなことも言えない。

かなりの女子が今の私の境遇になりたいのではないのだろうか？

出来れば譲ってやりたいのだが、そんなことを言っても皮肉にしか聞こえないであろう。

ここでも『大した興味がない人ほど当たる』というお決まりパターンが発動されたか……………

「それより離してよ結城君。彩芽だつて嫌がつてるでしょ？」

「つかさつきから結城君つて何だよ。翔也だろうが」

「いいの。結城君は結城君。翔也君は翔也君だから」

「どっちも同一人物じゃねえか……………。ああ、それと、雪の友達……………
確か……………」

「東雲です。東雲彩芽」

「そうそう。東雲だ。東雲は一緒でもいいか？」

「え？ええつと……………」

チラッと私の方を見たので私は『断つて！』とアイコンタクトを送る。

こういう時って便利だね。

「出来れば2人で食べたいかな、と」

やんわりと断る彩芽。

流石に面と向かって断る勇氣はなかったらしい。

「そうか……せっかく龍星たちもいるし、皆で仲良くと思ったんだが……」

「さ、鷺鷹君もいるんですか!？」

「ああ、今屋上で待ってる。行くか？」

「行きます!ほら雪!シャキッと歩いて!早く行くよ!」

「ちょ!押すな!」

この面食いの裏切り者め……っ!
覚えてろよ!

やすやすと結城君のトラップに引っかかりやがった!

おそらく結城君の方も、大抵の女子は誰かに興味があると目星をつけていたのだろう。
つぐつぐ計算高い男だ……

もう彩芽の目は期待で満ち溢れている。
くっ……!こっちの気も知らないで!

「あのさ、せめて手ぐらい離してくれない?」

「ダメ。絶対逃げるつもりだろ」

「いや、そういうわけじゃないんだよね……」

「じゃあ何だよ」

「周り、見てご覧なさい……」

『ねえねえ……あれって結城君よね……？手を握られてる子、誰？』
『さ、さあ……？知らないわ……』

『結城君って野々村さんのことが好きなんじゃないの……？』
『なんであんな子が結城君と一緒に……？』

そんなことは私が聞きたいくらいである。

この状況が不自然だということはとっくの昔に気づいている。
だが、私の名前が出てこないのは私の努力の賜物だろう。
ま、これを機にその努力も一気に水の泡だが……

「もしかして周りの目を気にしてるのか……？」

「そうです。ご名答。だから離して」

「ダメだ。これくらい目の線、日常茶飯事だ」

「あんたはどれだけ注目されてんの！？というか私は慣れてないし
！？」

これだけの視線がいつも集まっているなんて私には耐えられないだ
ろう。

「しかも集まってる視線は今にも殺しそうな勢いなんですけど！？」

本当に殺気が半端じゃない。

ああ……お墓くらい準備しとけばよかったな……

「いいから行くぞ」

「よくないですけど！？」

「よっしゃ！レッツゴー！」

「彩芽も人の話を聞く！」

くそ……っ！

聞く耳を持たないのか！？

私はそのまま、連行を続けられるのだった。

人の話を聞けっ！（後書き）

感想お待ちしております！

「屋上、お昼を食べよう！」

見事に釣られてしまった彩芽と共に屋上まで連れてこられてしまった私。

確か屋上には常に鍵が掛かっているはずだが……

「ねえ結城君、屋上って普通は鍵が掛かってるんじゃないの？」

「普通はな。だから俺たちは女の先生に頼んで鍵を毎回借りてるんだよ」

「屋上の鍵って貸し出し禁止だよ……？」

「知らね。頼めば貸してくれるし、いいんじゃない？」

「いいんじゃないね？って……」

先生も何をしてるのか……

いくらカツコいいからって生徒なんだから惚れたらダメでしょ……

「つべこべ言わずに行くぞ」

ガチャ、と鉄の重たい扉を開けるとその先には、一般女子の理想郷アガルタが、私にとっての地獄が見えた。

「おい翔也！遅かったじゃない！その子たち、翔也の言った子？」

「ああ、1人はその友達だがな」

「随分と時間がかかりましたね」

「ちよいと揉めてな」

「どうでもいいけど早く食おうぜ。腹減った」

「まあそう焦るなよ元就。先に軽く自己紹介だ」

「へいへい。俺は織田元就。部活は入ってない。1-Aだ。よろし

くな」

「僕は鷺鷹龍星。元就と同じ1-Aだよ。所属部活も同じく無し！よろしくね」

「どうも、工藤采夢っていいいます。1-Aです。部活は入ってないです。よろしく」

「ははは、始めまして！東雲彩芽です！1-Cです！よろしくお願います！」

彩芽……緊張しすぎだっ……

さて、次は私の番か。

「河北雪です。1-C。好きなものは読書。嫌いなものはキラキラした人です」

え？そんなこと言ったら嫌われちゃうだろって？
当たり前じゃん。それを狙って言ったんだから。

「へへ、キラキラした人たちが嫌いなんだ」

「なら俺たちは大丈夫だな。キラキラじゃなくてキラキラだし」

何を言ってるんだこの人は……

キラキラもキラキラも一緒だっつの……

「んじゃ、自己紹介も終わったし、食べようぜ」

「そうだね。雪ちゃんと彩芽ちゃんも適当に好きなお座りなよ」

いきなり名前呼びですか？

ま、別にいいけどね。

今、男子の方は円になって座っている。

よって、普通は誰と誰の間に座るといふ選択なのだが、私は違う。

ガシッ

私が移動を開始すると、すぐに結城君に腕を掴まれた。

「どこ行くだ雪」

「どこって……そこですか？」

そういつて、私は皆から5mほど離れたベンチを指す。

というか、今思ったのだが立ち入り禁止場所にベンチなんて必要か？

「そうか。じゃあ俺もそこで食う」

「結構です。私は1人で食べたいの」

「気にするな。俺はお前と食べたいだけだから」

「それ、答えになってない……。分かったよ。ちゃんと皆と食べるから……」

諦めて皆の輪に入る私。

彩芽は既に鷺鷹君のに座っていた。

私が座るのを確認すると、結城君は当然のように私の隣に座る。

そして弁当箱を開け、食べ始める結城君に私は一つの質問を投げかける。

「あのさ、こんなことしてていいの？早く告白しに行きなよ」

「は？告白？誰が？」

「あのね……結城君に決まってるでしょうが……結城君、野々村さんのことが好きなんでしょ？」

今はこうして私を屋上に連れてきたが、きっと野々村さんに告白し

に言ったはいいものの、急に恥ずかしくなつてあたかも私を昼ごはんに誘いに来た、という感じを装っただけだろう。そうたかを括つていた私だったが、結城君は思わぬ言葉を発した。

「野々村？誰だそいつ？」

「ちよ！誰つてあんたの好きな人でしようが！」

「名前も知らねえようなやつを好きになるかよ」

「待つて、もしかして結城君、本当に野々村さんのこと知らないの……？」

今日の朝まで知らなかった自分が言うのもおかしいが、この際そんなことを気にしている暇はない。

「知るかそんなやつ。元就たちは知ってるか？」

「さあ？俺は知らね」

「僕も。初めて聞いたよ」

「覚えてませんね……」

哀れ野々村さん……

あなた程のルックスであれば学年の皆が名前は知ってると思っていた（私は知らなかったけど）のに、まさかこの四人の内一人で一人として知っている人がいないとは……

「んで、なんで俺がその野々村つてやつが好きってことになってるんだよ」

「だって朝からそういう噂が流れてたし……。ね、彩芽」

「う、うん。結城君が好きな人が出来たって……。だからモデルみたいで一番可愛いって言われてる野々村さんのことなんじゃないかって……」

「モデルみたいに可愛い女子だったらおぼえてるよ。だがそんなや

つは知らねえ」

うん、スパツと行くね。

野々村さんが聞いたらきつとショックで不登校になるところだろうよ。

「まあ仮に結城君の好きな人が野々村さんじゃないにしても、私なんかより結城君の好きな人を誘いなよ」

「ね、ねえ雪ちゃん。今の発言、マジで言ってるの……?」

「当たり前です。好きでもない女の子より好きな女の子を誘う方が先でしょうが」

「そ、そうですか……」

「(な、なあ翔也……お前、今日の朝に抱きついたりして何となく好きっていう雰囲気を出したんじゃないのか?)」

「(出したつもりだったんだが、雪には効果がないらしい)」

「(鈍感ってわけか……苦労しそうだな……)」

「(同情、ありがとよ)」

さつきから織田君と結城君が話してるが何の話だろうか？

「(あ、あの……も、もしかして結城君って……)」

「(あ、気づいた? そうだよ。翔也はね、雪ちゃんのが好きらしいんだ)」

「(ええっ!? で、雪は!?)」

「(ご覧の通り気づいてないみたいだよ)」

むっ、彩芽のやつも鷲鷹君と何か話してる……

あの野郎こっちの気も知らないで……っ！

「さて、そろそろ昼休みも終わりです。お開きにしましょう」

工藤君がパンパンと手を鳴らし、そう告げる。

つて、ええっ!?

もうそんな時間ですか!?

まだ弁当全然食べてないんですけど!?

結局昼休みに私が食べることが出来たのは、卵焼きと唐揚げだけなのだった……

屋上、お昼を食へよう！（後書き）

感想お待ちしております！

昼休み終わり、イチヤモン

「ねえ！河北さんって結城君とどんな関係！？」

「なんで雪って呼ばれてたのっ！？」

あの男たちとの会話で忘れてた……

教室に戻ればイケメン大好きハイエナどもの女共がいるということ……

「べ、別にそんな皆が思っているような関係じゃないよ……。ただ親戚だったっただけ」

下手に隠して余計な問題事を起こすのも嫌なので正直に白状する。

「結城君と親戚！？凄じじゃない！羨ましいな〜！」

「そ、そう？でも親戚だからそれ以上の関係にはならないよ」

「でもよくあるラブコメってそんな展開じゃない？」

食いつくなあ……

大体ラブコメの世界が現実であるわけないじゃん……

「そ、そうは言っても相手は私だよ？結城君が私のことを好きになることなんてないよ」

とりあえず相手の気分を損ねないように慎重に言葉を選ぶ。

ほんと、大変だなこれ……

「ちよつと河北雪！」

突如、怒りながら私を囲む輪に入ってきた女たち。

確かこの人たちは……

「あんたの所為で私が恥かいたじゃない！どうしてくれるのよ！」

そうそう、野々村さんとその取り巻きたちだ。

「ええつと……私が何か悪いことでもした？」

「したわよ！あんたが居なけりや結城君は私のところに来てたのに！何で親戚のあんたのところに行くわけ！？意味わかんない！」

その文句を私に言いに来るあんたの神経の方が分からんがな、と言いたかったが火に油を注ぐ形になりそうだったので言うのをやめる。

「で、でも野々村さんに会いに来るとは決まってるじゃないじゃん？」

「はあ！？何言ってるの！？どう考えたってこの可愛いあたしに告白しに来るに決まってるでしょうが！それを恥ずかしがって近くにいた親戚の子を理由に逃げやがって！」

何この女……？

マジでムカつく……！！

つか自分でそう決まっただけじゃないって言ってたじゃんか！

結城君はあんたのことなんて全く知らなくて言ってやるつか！？

「そうよそうよ！本当だったらあんたらじゃなくて私たちが結城君たちとお昼を食べる予定だったのに！ふざけんじゃねえぞ！」

どこのヤンキーの文句だよ……

一回本当のことを言ってやるつか……！！

「はあ……あんたたち、取らぬ狸の皮算用って言葉、知ってる？」

「な、何よ突然……」

「まだ告白されたわけでもお昼に誘われたわけでもないのに勝手な妄想すんなってこと」

「あんたねえ……！！私に喧嘩売ってんの！？」

「さあ？とりあえずその自意識過剰のイかれた神経をどうにかすれば？」

「……っ！？ムカつく！地味な存在の癖に調子に乗って！」

「調子に乗ってるのはどっちよ？なに？本当に自分が結城君が惚れるような可愛いやつだと思ってるわけ？言っとくけど、結城君ころか鷺鷹君たちも誰一人としてあんたのこと、知らなかったわよ？」

「はあ！？そんなわけないでしょうが！この私よ！？」

「残念でした、本当なんだよね。可哀想に。捨てられた子犬の気分はどう？あ、子犬みたいに純粹で可愛くないか」

「……………うっっ……！！」

見る見る内に顔を真っ赤にしていく野々村さん。

ちよっとやり過ぎたかな……？

「言わせておけば好きなこと言っつて！あんたみたいな分際に言われる筋合はないのよ！」

手を上げて、私を叩こうとする野々村さん。

私はそれを受け入れるかのように動かず、次にくる衝撃を待ったのだが……

その攻撃は一向に来なかった。

ゆっくりと目を開けると、野々村さんのその上がった手を掴んで抑えてる手が。

「ゆ、結城君!？」

声をあげて驚く野々村さん。

そして、『わ、私ったらなんてはしたないことを……/ / /』と
言つてスカート裾を整える。

物凄い豹変振りだ。

「え、ええつと……ど、どうしたの結城君? 私に何か「黙れ」え…
…?」

「黙れと言つたんだこのブスが」

昼休みにみせたような顔とは一変し、絶対零度の表情をしている結
城君。

誰が見ても物凄く怒っていることが分かる。

「お前、今雪に手を出そうとしたな? 調子に乗ってんのか? ああ、
もしかしてお前が野々村つてやつか? ブサイクだもんな、そうに決
まってる」

「ちよ、ゆ、結城君!？」

学校のアイドルの豹変振りに慌てる野々村さん。

「言っておくが、俺はお前のようなやつが好きでもねえし、興味も
ねえ。流れた噂だから仕方ねえが、間違つてもそんなことはない。
自惚れるな」

そして私の方に目を向け、

「ほれ、落し物だ」

そう言って差し出したのは私がいつも持ち歩いてる髪留め。
屋上に落としてたんだ……

「あ、ありがとう……」

「いいか野々村。今後雪に手を出したら分かってるんだろっな？」

野々村さんをギロツと睨みつけて教室を去っていく結城君。

教室に残ったのは、女子の歓声と、へたり込む野々村さん。
そして、ポツンと立ち尽くす私だった。

昼休み終わり、イチャモン（後書き）

感想お待ちしております！

見つからない理由

なんで結城君が……？

いや、ヘアピンを届けに来てくれたのは助かる。

でもあの最後の言葉は何なんだ？

『今後雪に手を出したら分かっているんだろっな？』

リピートするその言葉に違和感を感じる私。

何でただの親戚である私をそこまでかばうんだ？

そりゃあ、知っている人が知らない人になにかされていたら少しは気にして、人によっては助けにくるだろう。

だが、結城君みたいな人がこんなところにノコノコやって来れば、無駄に目立つことは分かっているじゃないか。

誰も私の心配をしているわけではない。

お昼を食べるのにわざわざ誰もくるはずのない屋上を選ぶような人が、とてもじゃないけど自分から目立ちたいと思う人とは思えない。それにさっきの野々村さんとのやり取りだって、叩かれそうにはなかったが、あれ以上酷くなるような様子はなかったはずだ。

なのになんで……！？

「いや、危なかった危なかった」

ホッと安堵の表情で私の隣に来た彩芽。

「ほんと、結城君が来てなかったら危なかったよ」

「彩芽、あんたは何でここに結城君が来たのか分かった？」

「ヘアピンを届けに来たんでしょうが」

「いや、だったら彩芽に渡すなりなんなりすればいいじゃない。わ

わざわざあのタイミングで入ってくる理由がないじゃない……」
「はあ……雪って本当に鈍感。結城君、相当怒ってたよ?」あいつ誰だ』って言って、野々村さんの名前言ったら『ふざけやがって』って言いながら雪の所に行ったのよ?」

ああ。

気にしてなかったが、結城君が野々村さんの名前を言ったのはそのためか。いくらなんでも本人ってちゃんと認識しないでブサイクだなんて言わないもんな。

「でもそれじゃあ解決になってないじゃない。私が聞きたいのはここに来た経緯じゃなくてわざわざあの輪に入ってきた理由、もっと言えば、怒った理由なの」

「それは雪が自分で考えなさい……」

はあ、と再びため息を吐く彩芽。

それが分からないから聞いてるんでしようが。

「で、どうするの?」

「どうするって……何を?」

「お礼に決まってるでしょうが。助けてもらったんだから何かしらのお礼はしないと」

「それはそうだね……って、彩芽、もしかしてそれを理由に鷺鷹君に会おうとしてない?」

「あはは!バレた?いいじゃん、せっかくのチャンスだし、しっかり生かさないと!」

「さいですか……」

凄いな彩芽は……

最初はあんなに緊張してたのに、もう慣れちゃって……

「もうアドレスとかも交換したし」
「早っ!?!いつの間に!?!」
「ついでに雪のメルアドも教えておいた」
「なっ!?!それは私のプライバシーに反するけど!?!」
「いいじゃん。多分もう皆からメール来てると思うよ」
「え……?皆……?」

恐る恐る携帯を取り出し、開く。

『メール着信3件』

うん、彩芽のやつ、やってくれたね……

滅多にこないメールが一気に三件も入ったところを見ると、きっと鷺鷹君たちからだろう。

無視するわけにもいかないので、メールを開く。

『ども!鷺鷹です!彩芽ちゃんからメアド教えてもらったから送りました!登録よろしく!』
『ども!工藤です。登録、よろしくお願いします』
『登録しとけ』

なんなんだよこの読むにつれて段々文字数が少なくなってるこれは

……

鷺鷹君と工藤君は名前打ってるけど、織田君は打ってない……
というか短過ぎでしょ……

とりあえず適当に登録を済ませて携帯を閉じる。

「んで？雪はどんなお礼するわけ？」

「分からない。大体結城君の好きなものとか全く知らないし」

「え〜？親戚なのにな〜？あ、そうだ！じゃあそのお礼を買いに行くついでに結城君と出掛けてくれれば？」

「はあ？何言ってるのよ彩芽は……。私がそういうのが苦手なのは知ってるでしょうが……」

「大丈夫だって。もし雪一人が嫌だったら私もついて行くよ」

「それついて行くんじゃないかってついて行きたいの間違いでしょ……」

「おおっ！ご名答〜！とにかく、そうしようよ！ね！」

「で、でもね、結城君にだって予定というものがあるかもしれないし……」

「安心ななって！私がなんとかしとくから！いいね！」

「は、はあ………」

何とかするって立場間違ってるないか……？

なんか本当に彩芽が変わった……

親友の変化に気づきつつ、どうやって誘うのだろう？と、彩芽の行動が気になる私であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162x/>

恋愛交渉術

2011年10月26日02時02分発行